

【活用にあたって】

段落構成のつかみやすい文章です。おおまかな内容を各段落一行で書いてみます。

第1段落：「生物季節観測」が縮小される

第2段落：残すことになったもの

第3段落：縮小することになった原因

第4段落：廃止されることになった動植物

これらのことが読み取れていれば、設問には答えられるでしょう。

説明的な文章では、「抽象」と「具体」を区別しながら読むことが大切です。「第1段落：生物季節観測が縮小される⇒第2段落：具体的には、アジサイの開花など」という段落相互の関係を丁寧に読み取っていくことです。

解答例

問1：花の開 ～ らえる

問2：1953

問3：第3段落

季節の使者 リストラに 異議あり

気象庁が初鳴き観測の廃止方針を決めたクマゼミ



トノサマガエル



ウグイス



モンシロチョウ



地球温暖化など長期的な気候変動の貴重な指標となり、季節の便りとしても親しまれてきた「生物季節観測」を、気象庁が今年いっぱい大幅縮小する計画が物議を醸している。セミの初鳴き、カエルの初見など動物の観測を全廃し、タンポポの開花など植物の大部分も廃止。残すのは桜の開花、カエデの紅葉など植物の一部だけという大リストラ方針に、気象予報士からは「乱暴ではないか」と批判が出ている。

(宇佐見昭彦)

気象予報士「動物観測全廃 やり過ぎ」

気象庁は観測削減の理由に、気象台周辺の都市化など「生環境の変化」を挙げる。植物の標本木の確保や、動物を見つけることが自体が難しくなったという。

これに対し、天気キャスターで気象予報士の森田正光さんは「動物の観測全廃は信じがたい。いくら気象庁にお金(予算)がないとしても、やり過ぎでしょう」と驚きを隠さない。「職員が目視する必要のないセミや野鳥の初鳴きなども観測困難なのか。観測できないなら、観測できなかったことを確認する。それもまた立派な観測だ」

さらに森田さんは、クマゼミを例に挙げ「温暖化の重要な指標」と指摘する。クマゼミは主に近畿以南に生息していたが、近年は北限が関東付近まで達したとされる。「北関東や東北地方南部でも

観測種目に追加すべきではないか」

気象庁OBで埼玉県に住む気象予報士も「理解できない。自然界を観測する役所が、自然とのつながりを軽視している。観測を続けるから分かることがある。やめたからなくなる」と懸念する。

「気象庁(の上層部)はもともと生物季節観測をやめたがっていた」と話すのは、別の元職員だ。「近年は防災にシフトし、防災に直結しない業務が軽視されている。予算の事情と定員削減が背景にあり、気象台の現場では余裕がなくなっている」と嘆く。

地方気象台で働くある現役職員は「観測をやめることで将来に禍根を残さないか、という思いに駆られるのも事実。しかし、人員削減が続く現状では、背に腹は代えられないというのも本当だ」と現場の苦悩を打ち明けた。

気象庁の観測整備計画課は、本紙の取材に「生物季節観測の大幅削減の背景に予算や人員の事情はない」と回答。気象予報士らの批判についても「コメントする考えはない」と答えた。



生物季節観測 1953年に全国の気象台などで開始。都市部で見られなくなった生物を除外するなどの一部見直しを経て、植物34種目(41項目)、動物23種目(24項目)の観測が続いてきた。大幅削減計画で残る植物は、桜の開花・満開、イチヨウの黄

葉(おつよう)・落葉、カエデの紅葉・落葉、アジサイ・梅・ススキの開花の計6種目(9項目)のみ。動物はウグイス・アブラゼミ・クマゼミの初鳴き、ツバメ・トノサマガエル、モンシロチョウ・ホタル・アカアカネ(赤トンボ)の初見などを一挙に廃止する方針。